

## 学生と協働

青嶋 由美子・岡本 雅子・杉山 和恵・朝元 尊

### 1. はじめに

保育者になるにあたって大切な要素は数々ある。子どもの発達の過程を正しく理解すること、発達の過程に対して適切な対応が取れること、子どもの目線に立って行動出来ること、子どもの心に寄り添えること、子どもに対する意識を保護者と共有出来ること、地域の中での園の役割や意義を理解していること、家庭支援の役割を担えること等、実に様々である。本学でも講義・実技・実習を通して、保育者を目指す学生がこれらの要素を獲得するように意識付けを行っている。

これらの要素のひとつに「協働性」が挙げられる。「協働」とは、一般的には「同じ目的のために、力をあわせて働くこと」と考えられており、「協働性」とは「複数人のチーム内で理解や指示を得て、お互いに協力して課題に取り組む能力」<sup>1)</sup>という捉え方が出来る。この「協働性」については、保育所保育指針解説にも「保育所全体の保育の質の向上を図るため、職員一人一人が、保育実践や研修などを通じて保育の専門性などを高めるとともに、保育実践や保育の内容に関する職員の共通理解を図り、協働性を高めていくこと。」<sup>2)</sup>と記されている。また、本学幼児教育・保育科のディプロマポリシーにも「3. 他者とコミュニケーションをとることができ、協働できる」と記されており、その重要性は科全体で認識されている。

では、学生がこの「協働性」を備えるためには、どのような体験が必要となるのであろうか。はっきりとした課題の設定と共有、複数人で構成されるチーム内でお互いの思考や意思を確認するためのコミュニケーション能力の育成、課題達成の際に得られる満足の三点が含まれる体験と言えるのではないか。

本科では、COVID-19感染防止の対策が打ち出されて以来、講義や実技・実習の中でそれまで当たり前に行われてきた学生の共同作業の機会が激減した。それに伴い、卒業時の学生に対して行う「卒業生アンケート調査」の結果にも大きな変化が現れた項目があった。「学修の成果に満足しているか・在学中に向上したと思う知識や技能について」という質

1) ちょこまな 「協働性とはどんなもの？」 2022年1月4日掲載

<https://b-engineer.co.jp/chokomana/e-s-student/e-s-education/1127831/>

アクセス日 2022年10月21日

2) 『保育所保育指針解説書』（厚生労働省）2008年:「第7章 職員の資質向上」において「1 職員の資質向上に関する基本的事項」の「(2) 職員の共通理解と協働性」

問の中で、「協働性」に関連する項目については、「コミュニケーション能力」「協調性」「プレゼンテーション力」の三つがある。その項目について「満足」「向上」と回答した割合を見ていく。まず、「コミュニケーション能力」について、2018年度卒業生89.4%・2020年度卒業生84.6%・2021年度卒業生74.3%と、四年間で15ポイントも減少している。「協調性」については、2018年度卒業生76.6%・2020年度卒業生78.5%・2021年度卒業生71.6%と四年間では5ポイント、前年比較では約7ポイントの減少である。「プレゼンテーション力」についても、2018年度卒業生44.7%・2020年度卒業生29.2%・2021年度卒業生32.4%と四年間で約12ポイント減少となった。

2022年度の開始にあたって、初年次教育を行う科目「保育者のライフデザイン」「保育者のキャリアデザインⅠ」担当者の中で、学生達がこの「協働性」を醸成出来るようにするため、もう一度授業内容を考え直さなければいけないという共通認識が持たれた。出来る限りコロナ禍前のような協働作業の体験を学生達に味わってもらいたいという強い思いはあったが、春学期には第7波の影響もあり、予定していた豊橋自然史博物館への学外研修は直前に中止となった。夏季休業中に教員達の間で幾度も検討を重ねた結果、学生達が「協働」する機会を作らなくてはと考え、COVID-19感染防止対策を十分に施した上で、学園祭に1年生が参加することを決定した。三年ぶりに地域の子どもと触れ合いながら、学生達が協働する体験をしてもらう機会を作ることとなった。1年生4クラスそれぞれが「バルーンアート」「紙鉄砲」「シャボン玉」「紙飛行機」のブースを設営し、来場した子どもやその保護者と共に、制作や実演を楽しむという趣向であった。

本稿では、この2022年10月22・23日に催された学園祭での企画や立案・準備・運営や実施を通して、学生がどのように感じたかというアンケート調査をまとめている。アンケート項目は、「協働」に関するものが中心となっている。教員側の意図が反映されたかどうかについても探っている。

## 2. アンケートの実施について

本アンケートは、2022年10月24日（月）Google Classroomを通して、本学科1年生全員を対象に実施した。アンケートへの回答を学生に依頼する前に、本アンケートの実施の目的、結果は紀要に発表予定の資料として利用する点、回答は個人が特定される形では利用されない点、発表資料としての利用を望まない場合はその旨伝えてくれれば利用しない点を説明した。

アンケート用Formでも、冒頭に、  
「皆さんは、学園祭でクラスの出し物を企画・準備・実施してくださいました。このようにある単位（今回はクラス）で友達と一緒に課題を達成していくために協力しながら行動することを「協働」と呼びます。

今回は、この「協働」に関するアンケートにご回答をお願いいたします。

このアンケート調査は、他の学修行動調査等の結果と共に1年生の担任全員で本学紀要（研究雑誌）に研究成果として発表する資料となります。

個人が特定される形での発表はありませんが、自分の結果は利用されたくないという方は最初の設題でその旨を表明して下さい。その場合、公表するデータからは結果を省く形といたします。」

と明示し、最初の質問（問1）を「あなたの回答結果を、公表するデータに含めることについて、あなたの意向を知らせてください。個人は絶対に特定されません。」とし、回答を「同意する」「同意しない」の選択としている。

総回答数は、60名であったが、そのうち4名が「利用について同意しない」を選択したため、56名分の回答をまとめている。

### 3. アンケートの結果

問2 学園祭の準備・実施を通して、クラスメートの今まで知らなかった面を知ったと感じたことはありましたか

あった	22名 (39.3%)	少しあった	24名 (42.8%)
あまりなかった	9名 (16.1%)	なかった	1名 (1.8%)

・クラスメートとの関わりの中で、今までにはない新しい面に目を向けられた学生が8割を超えている。通常の形態での授業を通してだけの交流では得られないものがあると思われる。

問3 学園祭の準備・実施の際、クラスメートと普段より会話が多かった・弾んだと感じましたか

感じた	38名 (67.9%)	少し感じた	13名 (23.2%)
あまり感じなかった	4名 (7.1%)	感じなかった	1名 (1.8%)

・9割を超える学生が、コミュニケーションの機会の増加を感じている。初年次教育科目における独特の課題と到達目標の設定が、学生達に意見交換の必要性を感じてもらえる契機となっている。

問4 学園祭の準備・実施の際にクラスメートと共に作業を行ったときに、どのように感じましたか。該当するものを全て選んで下さい。また、さらに付け足したい点がある場合は、次の質問で回答してください。

楽しい	46名 (82.1%)	面白い	23名 (41.1%)
やりがいがある	23名 (41.1%)		
新しいことを知れる	18名 (32.1%)		
しんどい	0名 (0%)	やりたくない	0名 (0%)
負担だ	0名 (0%)	その他	3名 (5.4%)

・クラスメートとの協働作業については、8割を超える学生が「楽しい」と感じ、否定的な選択肢への回答は無かった。コロナ禍で制限されてきた「誰かと一緒に作業をすること」が、学生にとって喜ばしい体験となっていることが分かった。

問5 4の設題でその他を選択した方は、どのように感じたのか具体的に記入してください  
(回答の原文通りに記してる)

- ・仕事するときはしっかり仕事をしてほしい
- ・たくさんの子と話すことができた
- ・沢山会話したから ・楽しい分大変
- ・みんなで1つのものを作るために試行錯誤したり、環境設定もみんなで案を出しながら考えて、すごく楽しかった
- ・授業とかでは席の近くの人としかディスカッションをしないので、つまらなかったですが、創造祭を通して、あまり話したことの無い人と話せる時間が多く、久しぶりに「仲良くなれた！もっと仲が深まった！」と感じられて楽しかったです。
- ・以上の記載の中には問4の選択肢では表現出来なかった不満もあるが、コミュニケーションを取ることや協働を体験した楽しさが述べられている。

問6 学園祭の準備・実施を通して、教員とのコミュニケーションの機会が増えたと感じましたか

感じた	30名 (53.6%)	少し感じた	20名 (35.7%)
あまり感じなかった	5名 (8.9%)	感じなかった	1名 (1.8%)

- ・教員とのコミュニケーションの機会についても、肯定的な回答が9割近くになっている。作業を共に行うことが、学生と教員との距離を縮めていると考えられる。

問7 クラスメイトと共に行った学園祭の準備・実施を通して、自分の持つ協働関係を作ろうとする力をどのように評価しますか

強まった	18名 (32.1%)	少し強まった	31名 (55.3%)
変化ない	6名 (10.7%)	少し弱まった	0名 (0%)
弱まった	1名 (1.8%)		

- ・全体の9割弱が、協働関係を作ろうとする力の伸びを認めている。ただし、「協働関係を作ろうとする力」の定義を教員側から明確な形で提示していないため、自己評価の観点にばらつきがあると予想される。

問8 クラスで実施した企画においてになった方(子ども・保護者等)とコミュニケーションをとれたと感じましたか

感じた	34名 (60.7%)	少し感じた	19名 (33.9%)
あまり感じなかった	1名 (1.8%)	感じなかった	0名 (0%)
実施日に参加出来なかった	2名 (3.6%)		

- ・日常的に接するクラスメイトや教員以外の人ともコミュニケーションを取れたという自信が芽生えている学生が多いのではないだろうか。初めての實習の際に、保護者との関わり

方が上手く出来なかったという反省が出ることが多い。ここでの経験を実習に生かせることが望まれる。

問9 今回の学園祭の準備・実施で感じたことを自由に記述してください（回答の原文通りに記載してある）

（下線は、今回の調査目的である「コミュニケーション能力」「協調性」「プレゼンテーション力」に関連ある部分に付した。）

- ・クラスの友達とたくさん話す機会があり、自分の意見を言ったり相手の意見を聞きながら作業を進めていたため、とても楽しかったです。また、担任の先生とも話す機会が多く、嬉しかったです。バルーンアートは初めてでしたが、初めは何も作れなかったのに今ではいぬとはなを作れるようになりすごく嬉しい気持ちと達成感でいっぱいです。また、来てくれた子どもたちやその保護者ともコミュニケーションをとり、子どもが喜ぶ姿をたくさん見ることができたので嬉しかったです。
- ・今まであまり喋れていなかった子とお話できて楽しかったです。また、来てくれた子ども達や保護者の方たちに最初は話しかけることが出来なかったのですが、途中から段々と話しかけられるようになってきて、少し成長できたかなと感じる事が出来ました。ですが、今回やったものが自分には出来ないものだったので、クラスの子に頼りきりになってしまったのが申し訳なかったなと思います。
- ・今回の学園祭は楽しかった。クラスのみんたと協力して楽しめた。学園祭があるというのをもう少し早く伝えてほしかった。今年も1年はやらないものだと思っていたし、伝えるのが遅かった割にはクラスで準備する時間も少なかった。学校が一番なのはわかるが流石にこのようなことはきつい予定もキャンセルせざる負えなかった。これからはこのようなことがあってほしくない。
- ・バルーンアートをするのは初めての経験で、練習のときに上手く作れなかったことで本番上手く作れるか心配だったけど、みんなと協力したり教え合うことで最後には自分の力で上手に作る事ができました。この学園祭を通して仲間と協力することで自分が少し成長できた気がしました。
- ・短い時間でしたがたくさん子どもたちが来てくれて、楽しそうに帰っていくのを見て、とてもやりがいを感じました。とても楽しかったです。あつという間に時間が経ちました。充実した時間でした。来年も楽しみです。
- ・担当する人数が少なくて実施が少し大変だった。次の日大学あるのは体力的にも大変なのでせめて金曜日、土曜日で実施をするか、1日だけやったり、土日実施したとしても月曜日は休みにするべきだと感じた。
- ・私は看板の背景をクラスメイトと一緒に作りましたが、全員で協力し一人一人の新たな一面も発見でき、沢山コミュニケーションを取れたので良かったです。とてもやりがいがありました。
- ・子どもたちの目の前でバルーンで剣やうさぎを作ってあげた時とても喜んでくれていて、

楽しませることができた。機会があればまたバルーンアートをしたいと思った。

- ・サークルの方との連携で中々クラスの方へ行くことができなかつたけど、皆で協力して楽しみながら準備できて達成感がありとても楽しかったです。
- ・割と直ぐに終わって負担はあまりなかつたため楽しい部分だけ感じる事が出来た。学生会の子達に感謝！
- ・企画に来ていた子どもだけでなく、保護者の方ともお話が出来て緊張したけど良かったと思う。
- ・クラスみんなで一つの事をやる事ができて、楽しかったしうれしかったです。
- ・学年や学部を超えて沢山の人と関わる事ができたので良い思い出になりました。
- ・協力することで団結力が強まったり色々なアイデアがでて楽しい準備になった
- ・準備からみんなで動いていいものが見つけたとおもいます。
- ・子どもとの接し方が少し理解出来たように感じた
- ・思ってたより大変だったけど楽しかった。
- ・準備をするみんなが頑張っていて良かった。
- ・みんなで何かを成し遂げることを、クラスの子たちはコロナで機会を失っています。それでも、クラスを引っ張っていく子もいたり、縁の下力となっている子、ムードメーカーとなっている子もいたり自分らしくいれたと思います。楽しい思いも、嫌な思いもしたかもしれないけどどの子にとってもいい経験になったと思います。
- ・準備が意外と大変で当日までにできるか不安だったけど、クラスみんなが沢山動いてくれたので良かったです。当日は子どもと触れ合うのが久々で最初はどう接したらいいか分からなかつたけど、やっていくうちにだんだんと子どもへの接し方がわかるようになり、保育としてもいい機会だったなと思いました。わいわくで得たことを実習や現場に出た時に活かせるらいいなと思いました。楽しかったです
- ・少ししか話したことのなかつた友達とたくさんの時間話す事が出来て、その人の知らなかつた部分や、どんな性格なのかを知ることができました。それも1人ではなく大人数ですが、準備や実践する中でしか関わる事が出来ないで授業でも席の近くの人だけでなく、遠くの人ともディスカッションしたいと思いました。
- ・子どもたちと保護者の方と実際に関わることで、どのような声がけをするといいのか、とても勉強になりました。シャボン玉液一つでも、乳児にとっては危険なものなので、年齢によっては、あまり存分に遊ばせてあげられませんでした。対象年齢、安全への環境構成を考えるきっかけになったと感じています。
- ・クラスで準備段階から一緒に作り上げて、今まであまりたくさん話したことがなかつた友達と話す機会が増えたり、友達の知らなかつた一面が見れたりしました。当日は来てくださった子どもにどのように教えたらか考えながら出来ていい経験となりました。また、楽しみながらできたので良かったです。
- ・ひとつの活動にみんなで取り組むのは楽しいしやりがいもあった。けど少しの考え方の違いなどでみんなの思い通りになつていなかつた気もした。来年は決められた活動ではなく

1から考えて協働してよりよい学びと達成感を得たいと思った。

- ・自分のクラスの仕事だけではなく、それぞれサークルでの仕事があったり、出し物があったりする中でクラスメイトと話し合いクラスメイトの良さを知れたし、自分がやるべき事の取捨選択の仕方に甘さがある事も分かった
- ・色んな形の紙飛行機の作り方を覚えたりするのが大変でした。子どもたちに紙飛行機の折り方を教えるのは最初はできるか不安だったけれど、みんな楽しそうにやってくれたのでとても嬉しかったです。
- ・クラスメンバーが相手を気遣いながら自発的に行動する姿が見られました。一部のメンバーだけでなく、クラスメイト全員が工程を把握して取り組み、クラスのまとまりを感じました。
- ・クラスメイトで協力して何かを成し遂げるという事が昔から好きだったのと、あまり話したことがない子と話す機会が増えるのもっとこのような行事が増えればいいと思いました。
- ・アイデアを出す際に大人数の意見があると「こんなアイデアもあったんだ」という気づきが多かった。久しぶりに子どもと関わったが、教えるためにかける言葉をすごく選んだ。
- ・学園祭当日、地域の方々と交流できて楽しかった。同じクラス、同じ科の子だけでなく、他のクラスの子や他の科の人と話すことができて楽しかった。
- ・準備の期間が少なくて少し大変な部分もあったけど子どもたちが楽しそうに遊んでいるのを見て、頑張っただけ良かったなと思いました。
- ・クラスメイトとの仲が深まったと思いました。みんなでひとつのものを協力して行うことはやはり楽しいと感じました。
- ・Cクラスが実施したしゃぼん玉では、多くの子どもたちや保護者の方に楽しんでもらっていたので、よかったです。
- ・たくさん子どもたちと触れ合うことができ、子どもたちも楽しそうに活動をしてくれて嬉しかったです。
- ・担当する学生の人数と学園祭に来てくれる子どもの人数が合わず、少し退屈な気持ちになってしまった。
- ・すごく楽しく、全体的にまとまりがでたので2年での青コンなどにもこの経験が活かせると思った。
- ・意外と大変だった。けど、子どもたちと楽しくできた点は良かった。

#### 4 まとめ～担当教員の所見・考察～

①担当しているクラスは、春学期の様子を見ている限り、大人しいクラスだなという印象であった。特に配慮が必要と感じられる学生は居なかったが、積極性に乏しく、クラスとしてのまとまりが無いように感じられた。他の教員からも「真面目な学生が多いようだが、反応の乏しいクラス」とジャッジされていた。だが、そのような中でも「保育者のライフデザイン」でチームを作る際には、仲の良い子同士でまとまるのではなく、折々に「色々な人と

接したいから、くじ引きでグループ分けをしたい」「交通手段による分け方で大丈夫」という提案が出され、グループ作りはスムーズに行えていた。教員が感じているほどにクラスのまとまりが無いわけではなく、もっとクラスメートと知りあいたいのかなと思うこともあった。

今回の学園祭での企画・準備・運営に関しては、改めて学生が持つ「協働性」の発揮を感じさせられた。企画・準備については、おおまかな流れの説明はしたが、他は全て学生に任せてみた。準備のためのグループ分けをはじめ、何をどのように仕上げ、練習をし、担当日を決めるか等々、準備にあてられる時間は限られていたが、学生達は、話し合いをし、協力しあい、当日に間に合うように準備を進めていた。授業時間を過ぎて、制作や練習を続ける姿が見られた。とりわけ驚いたのは、学生から必要な品を買い出しに行きたいという申し出があったことだった。自分たちで判断し、教員に相談し、実行していく姿を見せてくれた。学園祭当日の運営についても、大小のトラブルが発生する中、お客様として来場して下さった地域の子供達や保護者の方に気持ち良く楽しんでもらおうとする行動をとって来ていた。ここでも、個人で判断するのではなく、何人かで相談しながら進めていく様子があった。

この一連の過程を通して見えてきたのが、いつも行動を共にしている友人以外との会話の多さだった。回数を重ねる毎に、話をする機会は増え、口調がぐだけたものとなり、会話の幅が広がっていった。さらに、コミュニケーションを取る相手の人数とその機会が増加するにつれ、アイデアが出され、それについての意見も交わされるようになっていった。相手の提案を否定する発言はなく、認めたうえで自分の考えを述べるケースもあった。自分の考えをプレゼンする力と相手の考えを聞く力を併せ持ち、課題達成への道のりを進む姿が多く、の学生に認められた。

学園祭後、クラスの雰囲気は変わっていた。「一見すると大人しい」という点はあるようだが、一つの課題を共に頑張ってクリアした者の間に連帯感のようなものが生まれたように感じられる。春学期と比べてみると、今まで会話をしている姿が見られなかったメンバー同士で話をする姿も多くなった。様々な学生の組み合わせでのコミュニケーションの機会が増えており、学生同士の距離感が縮まったようである。授業を受ける時の様子にも積極性が認められるようになった。人前でスピーチしたり絵本を読んだりする際にも抵抗感が少なくなり、自分以外の学生の発表もしっかりと受け止められるようになってきた。教員との距離感に関しても、随分と近くなったように感じている。担任の担当分野以外のことに関しても、まず聞きやすいところから聞いてみようという意識で、質問にくることが非常に多くなった。「共通の課題解決・目的達成をゴールとし、コミュニケーションを重ねながら、協力しながら働く」という体験が、学生達にもたらしたものは本当に大きなものであった。COVID-19感染防止対策として、「マスクは着用したままで」「大きな声での発話は控えて」「密集しないで」等の多くの制約があり、ここ数年の本科在学学生は「協働」の体験の多くを欠いたまま学生生活を送らざるを得なかった。もう暫くの間、このような制約が続くのだろうが、今回、学園祭での「協働」体験が学生達に与えた効果は、アンケート結果から明白となって

いる。このような機会を恒常的に学生に与えられるように教員サイドが努力をする必要性を感じている。

②Bクラスでは、学園祭までに看板をデザインする学生と絵が得意な学生を中心に協働して描くグループ。また、教室の机の配置や椅子の配置など、子どもとかかわる環境を構成するグループなど、自分のやってみたいことや得意とすることを基に役割が分担され準備が進められた。前日までには、子どもと遊ぶ素材を実際にシミュレーションしたり、試作品を多めに作ったりして当日に備えていたが、学生の中には期待と不安が入り混じった様子が見られた。

学園祭の2日間では、初めて会う子どもと保護者に笑顔で接し、子どもとの関わり合いもスムーズに行う学生がほとんどであった。言葉掛けに苦勞する学生もいたが、保護者の方が間に入ってくれることで穏やかに進む様子であった。こういったことを経験することで、学生自身が直接学べていることを確認できた。

普段の授業の雰囲気と違う中で自分たちの目標に向かって協働作業をすることにより、積極的な行動やコミュニケーションが見られた。準備等も時間を掛けて行うことで、より活発な意見交換や工夫するアイデアなどが生まれ、学生に任せて実施することの良さが表れたのではないだろうか。

アンケートのデータから、「学園祭の準備・実施を通してクラスメイトの今まで知らなかった面を知ったと感じたことはありましたか」の問いや「学園祭の準備・実施の際、クラスメイトと普段より会話が多かった・弾んだと感じましたか」の問いに対し、「あった・少しあった」を合わせると高い数値で実感していることから、貴重な経験であったことが推察される。また、「学園祭の準備・実施の際にクラスメイトと共に作業を行ったときに、どのように感じましたか。該当するものを全て選んでください」の問いに対し、「楽しい」・「やりがいがある」・「面白い・新しいことを知れる」の順で、前向きな回答が多かった。「学園祭の準備・実施を通じて、教員とのコミュニケーションの機会が増えたと感じましたか」については、活動においてコミュニケーションは増えるが、学生自身が自分たちで考えて活動することを優先させたいと考え、教員としては一歩引いて関わることを心掛けた。その他の問いに対しても概ね高い数値であり、学園祭の実施を通して学生が成長したと感じる点が多々あった。

自由記述では、「私は看板の背景をクラスメイトと一緒に作りましたが、全員で協力し一人一人の新たな一面も発見でき、沢山コミュニケーションを取れたので良かったです。とてもやりがいがありました。」・「短い時間でしたがたくさん子どもたちが来てくれて、楽しそうに帰っていくのを見て、とてもやりがいを感じました。とても楽しかったです。あっという間に時間が経ちました。充実した時間でした。来年も楽しみです。」・「協力することで団結力が強まったりいろんなアイデアがでて楽しい準備になった」・「担当する人数が少なく実施が少し大変だった。次の日大学あるのは体力的にも大変なのでせめて金曜日、土曜日で実施をするか、1日だけやったり、土日実施したとしても月曜日は休みにするべき

だと感じた。」などの記述があった。

長く続いているコロナ禍において、人との距離感やコミュニケーションなどが取りづらく、協働を伴う活動を経験する機会も少ない学生たちにとっては、学園祭での活動は有意義な経験であったと思われる。しかし、積極的な学生は、学園祭での活動を楽しもうと前向きな気持ちで取り組む姿勢が見られる一方で、コミュニケーションの苦手な学生にとっては協働して行動することや、クラスメイトといつも以上にコミュニケーションを図ることには、多少のストレスを感じていることも、アンケートから読み取ることができた。

③学園祭、そして学園祭に向けた「しゃぼん玉」の企画・準備を通して、学生やクラスの様子について感じたこと、発見したことを以下にまとめる。

先ずクラスの雰囲気であるが、以前からCクラスは、元気で反応が良いクラスと、多くの教員から言われていた。全員が元気で活発というわけではないが、水を差すような冷めた空気感がなかったことから、クラスとしてはそのような雰囲気になったのだと思う。学園祭に向けての企画・準備においては、全体的には自分達で意見を出したり考えたりすることが楽しいと感じている様子であったが、時間内に準備をすることに関しては、取り組み方に差が出た。良く調べて発言するが、考えたり試したりといった活動内容にのみ注力する学生、発言は殆どしないが地道な作業にコツコツ取り組む学生、その両方に目配りしながら必要な行動を選択する学生である。全体としてはそれで上手く回るころもあったが、時間的な余裕があれば、もう少し一体感のある活動時間を増やせたのではないかと、残念に感じている。クラスの雰囲気としては、活動の前後に大きな変化はなかった。

学生個人に目を向けると、ただただ楽しみたい気持ちが強い学生から、子ども達に楽しんでもらえるよう納得がいくまで取り組みたい学生まで差があった。しかし、周りを思いやる気持ちを見せる学生、周りを見て必要なことを考えて行動する姿を見せる学生が増えた、或いはその様な姿を見る機会が増えたと感じている。周りを思いやる具体例は、地味な作業をコツコツと進めてくれた人に感謝の気持ちを伝えたり、描いてくれた絵が上手だと皆で喜んだり、コロナ関係で登校できなかったクラスメイトに励ましの動画を送るなどである。周りを見て行動していた具体例は、何時までも試し活動に夢中になるメンバーの傍らで、時間内に片付けが終わらないと気づき、(多分、多くの学生が面倒だと感じていた)洗い物を率先的に行ったり、学生会などの他の企画と重なり担当者が足りない時に、担当でないのに心配して見に来て手伝ったり、翌日は担当者が少なく準備が大変だからと、翌日分のしゃぼん液を作る等である。このように他者を思いやったり協力する姿勢は、元々備えていた資質なのか、協働の中で育ったのかは定かではないが、行事に向けての協働があったからこそ教員側に見えた、ということは確かであると思う。コロナ禍以前は、授業の中では見えない学生の一面が、このような場面で見えていたことを思い出した。学生の多面的な把握という意味で、教員にとって学生と共に協働することは貴重な時間であると改めて感じた。

最後に学生の感想から感じたことであるが、コロナ禍で多くの行事や協働の機会を失ってきた学生たちにとって、意見やお互いの都合、時間を調整することはとても大変に感じてお

り、これはコロナ禍以前の学生よりも強いように思う。しかし仲間と協働したり、色々な人と関わったり、誰か（お客の子どもたち）に喜んでもらえることに楽しさややりがいを感じるという、従来の保育系学生の持つ特徴は変わらずに表れていると思う。コロナ対策により制限、そして2年という限られた時間ではあるが、一つでも多くの協働の機会を確保する必要性を実感している。

④「紙飛行機」製作を実施したクラスについては以下の通りである。

#### 1. クラスメートとの関係について

学園祭を通して、クラスメートの今まで知らなかった面を知った、クラスメートと普段より会話が多かった・弾んだ、と感じた学生が殆どであった。自由記述でも、「クラスのまとまりを感じた」、「クラスメートとの仲が深まった」、「あまり話したことがない子と話す機会が増えるのもっとこのような行事が増えればいい」というような記述が見られた。結果として、学園祭により、クラスメートとの関係がより深まったと感じている学生が大半であり、それがクラスの雰囲気をもっと明るく快活なものにしたといえよう。

本学科の学生の特徴として、高校までの学校生活の経験から、もともとみんなで協力して何かを達成することが楽しいと感じる学生が多いということが、その背景にはあると考えられる。コロナ禍において学生同士の接触も抑制され、学生にとっては物足りない、もっとみんなと仲良くなりたい、という気持ちがあったのだと推測される。今回の「わいわくひろば」は2年ぶり、まだ不安が払拭されきれない中、制約のある環境下での実施であったが、それでも学生にとってはやりたいことがやっとできた、という一種の充実感や達成感があったのではないだろうか。

一方、教員側の反省として、企画実施を決定する時期が遅かったため、十分な準備の時間を学生に与えられなかったことは、申し訳なかったと思っている。準備の段階で、学生自身が企画のイメージを十分に描くことができないまま、当日になってしまった感がある。それでも、「紙飛行機」という与えられた題材の中で、どのような紙飛行機を作るのかについては、全員が考えを出し合い、実際に飛ばす実験をし、お互いに新たな発見や気づきを得ながら、全員の総意で4種類を決めたことは、全員参加の企画の出だしとしてはよかったと思う。

しかし、その後の出し物の環境づくりについては、経験不足もあり、アイデアを出す学生がなかなかおらず、戸惑っていた。最低限の看板づくりはなんとか数名が手を挙げて完成したが、環境づくりはほぼ手つかずのまま当日を迎えてしまった。学園祭後の反省として、子どもの視点で環境づくりを考えるべきだったと一人の学生が挙げたことが、他の学生にとっても学びになったことを期待したい。また、環境構成のアイデアがない中でも、進んで掃除をすることを申し出る学生が数名いたことは、明るい要素であり、大いに評価したい。集団の中で、今自分ができることを考えられることは大切であると反省会で学生に伝えた。

明確なリーダーとなる学生はこの行事を通して現れなかったが、クラス委員の学生からは、クラス内の役割分担について皆に確認したり、連絡を回したりと役割をこなそうとする努力が感じられた。これまでは委員としての活躍の場がなかったが、今回の学園祭をきっかけに

委員としての自覚が生まれ、その役割を果たそうとする中で、この学生が少し成長できたことが確認された。

## 2. 協働する力について

学園祭を通して、自分の協働関係を作ろうとする力がどう変化したかとの問いには、半数が「強まった」と答え、残りのうち3分の2が「少し強まった」、3分の1が「変化ない」と答えた。準備を含めて僅か1か月足らずの短い期間ではあったが、初めてのクラスでの協働の経験を通して、大半が自分に協働する力がついたと感じたことは大きな成果であった。

実際にそのような力がいくつかの場面で発揮された。そのうちの一つは、当日の役割分担についてである。自分達のコーナーがお客さんの目につきにくい場所にあり、呼び込みに行かないとなかなか来てもらえないことに気付いた学生達が、順番に呼び込みに行くようになった。結果的に分担がうまくいかなかった（部屋に残る学生が少なすぎた）時間帯もあったようだが、学生同士が協力して臨機応変な対応ができたことはよかったといえる。大半の学生は、協力しながら自分の役割をこなして良く動いたという自覚があり、それが協働する力として認識されているようである。

一方、協働する力に変化がないと答えた学生の一人は、クラスメートの知らなかった面を知ったと感じたか、クラスメートと普段より会話が弾んだと感じたかの問いのいずれにも「あまり感じなかった」と答えている。また、自由記述では、「担当する学生の人数と学園祭に来てくれる子どもの人数が合わず、少し退屈な気持ちになってしまった。」と書いている。実際、期待していたよりも客数が少なかったことは事実であると思うが、そのことの受け止め方が、学生によって異なっていたことがわかる。状況を改善するために積極的に自分達でどうしたらよいか打開策を考え実行できるか、受け身のまま意識が状況の改善に向かわずに意欲が削がれるかである。企画をどれだけ自分のものとして捉えていたかがポイントになろう。協働する保育者としての当事者意識を育成することは重要な課題であり、今後も引き続き取り組んでいきたい。